いつか（アリエッティVersion）

地球の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつか（アリエッティＶｅｒｓｉｏｎ）

【Ｎコード】
Ｎ７６４９Ｎ

【作者名】
地球の星

【あらすじ】
住み慣れた古い屋敷を離れることになったアリエッティは、翔と別れを告げた後、スピラーの操縦するヤカンに乗って両親と共に川を下っていった。
岸に上がって新しい家に向かって歩く途中、彼女は今朝翔に会って話したこと、さらには彼から角砂糖をもらったことが両親に分かってしまった。
その後も面倒な外敵に遭遇したり、住む場所に電気が通っていなかったり、水道が使えなかったりするなど、これまで体験したこと

のないことが彼女の身に降りかかってきた。
それでもアリエッティはがんばって生きていくことを心に誓った。

（前書き）

作中でアリエッティ達が住むことになる建物は、僕が昔よく出入りしていた倉庫をモデルにしています。

その建物周辺の景色は、僕が子供の頃によく行っていた田舎の場所と、今年（２０１０年）稲刈りの手伝いをするために訪れた場所を組み合わせたものです。

翔にさようならを告げた後、私は竹垣を降りて走り出した。
その途中、翔のことが気になり、ふと立ち止まって振り返った。
彼は高台の上に立ちながら、自分の足元の辺りを見ていた。
もしかしたらニーヤと私のことを話しているのだろう。
その光景を目に焼き付けながら私は再び走り出し、両親とスピラーがいる場所へと戻っていった。
ヤカンの所では両親が心配しながら待っていた。
「どうしたのよ、急にしばらく姿が見えなくなって。」
「お母さん、心配をかけました。」
「でも何だかすがすがしい顔をしているじゃないか。何かいいことでもあったのか？」
「別に、何もないです。それよりお父さん、もう出発するんでしょ？」
「ああそうだ。それじゃスピラー、頼んだぞ。」
「あいよ。」
スピラーはそう言うと、持っていたナイフでヤカンと岸を結んでいたロープを切った。
ヤカンは左右に揺れながら川を下っていった。
その途中、私は色々な種類の植物が生い茂った景色や、川の中を泳ぐ魚達を見て楽しんでいた。
近くに立っている木々からはツクツクボウシをはじめとするセミ達の鳴き声が絶えず聞こえていた。
川岸に生えている草にはいくつか花が咲いているものがあった。
そこには黄色や黒い色をした蝶(ちょう)が飛び交い、蜜を吸っていた。
空では何羽かのツバメ達がチュンチュンと鳴き声をあげながら上空を通過していった。
私は時々スピラーをチラッと見ることがあった。

しかし彼はすぐに目をそらしてしまった。
そのため、私達はお互い会話らしい会話をすることもないままだった。
中ではお母さんがぐったりと横になっていた。
一方、くつを直す作業を終えたお父さんが荷物を積み出す準備をしながら、お母さんの面倒を見ていた。

私が引越しの不安を抱えながらも、それを紛らわすようにして流れる景色に見とれていると、スピラーが急に「もうすぐだぞ。」と言ってきた。
私はそれを聞いて「えっ？」と言いながら振り向いた。
するとスピラーはまた顔をそらした。
「もうすぐ引越し先に着くの？」
「あ…、ああ。」
彼は顔をそらしたまま、どこかニヤニヤした表情をしていた。
私はヤカンの口のところに行き、中にいるお父さんとお母さんにそのことを伝えた。
「ああ。すでにいつでも運び出す準備は出来ているから大丈夫だ。」
「…やっと…着くのね…。」
元気なお父さんとは対照的に、お母さんはぐったりと横になったまま力なく答えた。
「お母さん、大丈夫？」
「ちょっと船酔いしたようだ。だが、どうにかなるだろう。」
「あなた…、それを言うならヤカン酔いよ…。」
お母さんは横になったまま、疲れた声で言った。
（ヤカン酔い…？）
私にはその意味が分からなかった。
それから間もなく、私達を乗せたヤカンは目的地に到着した。
「さあ、着いたぞ。」
スピラーはそう言うと、川の流れのゆるやかな所にヤカンを誘導

してくれた。
そして長いロープを取り出し、一端をヤカンの取っ手に結びつけた。
「お前、危ないからどいてろ。」
「何よ、『お前』って！私はアリエッティよ！」
私はやっと話しかけてくれたスピラーの言い方に思わず腹が立った。
「それじゃ、アリエッティ。危ないからどいてろ。」
「はあい。」
私は言われたとおりにヤカンの口の中に入り、はしごを降りていった。
スピラーはそれを確認すると、端の部分にかぎつめのついた長いロープをビュンビュン振り回し始めた。
ロープの回転スピードはみるみるうちに速くなっていった。
（何をするのかしら？）
私は不思議に思いながら彼の行動を見つめた。
「やあっ！」
スピラーは叫び声をあげながら岸をめがけてロープを投げた。
ロープは放物線を描いて飛んでいき、近くに生えていた小枝に引っかかった。
「よし！」
スピラーは勝ち誇ったように叫んだ。
そして彼はロープにぶら下がって岸に向かっていき、かぎつめが外れないようにをしっかりと枝に結んで固定した。
岸にたどり着いた私達はみんなで協力しながら新しい家に向かって荷物を運んでいった。
しかし、お母さんはハルという名の人間にさらわれたショックに、引越しの疲れに、ヤカン酔いという三重苦のため、少ししか荷物を持てなかった。

お母さんが背負えなかった分はスピラーが代わりに運ぶことになった。
私達は川辺の土手（私達からすれば崖に相当する高さだった。）をのぼり、若いススキやムラサキツユクサ、チドメグサ、ヨモギなどたくさんの種類の草が生えている所を歩いた。
しばらく歩くと今度は未舗装の道路を歩くことになった。
道路の中央にはたくさんのオオバコが生えていて、右端にはオミナエシやクローバー、ヒメジョオン、ハコベなどがたくさん生えていた。
その先には小さな小川を挟んで、未熟な稲穂が出ている稲がびっしりと生えた田んぼや、雑草がたくさん生えている空き地があった。
空き地といっても去年までは畑だったらしく、所々にほうれん草やダイコン、にんじんなどが野生化したように伸びていた。
一方、道路の左側は高い崖（人間の感覚では土手）になっていて、そこから先にはたくさんの種類の木がびっしりと生えていた。もちろんセミ達の鳴き声も大きく響き渡っていた。
この辺りには私が以前住んでいた古い屋敷の庭に負けないくらい、たくさんの植物であふれていたので、私にとってはきれいな景色に思えた。
その時、私の後ろを歩いていたお母さんが突然
「そう言えばアリエッティ。ずっと気になっていたんだけれど、髪飾りはどうしたの？」
と言ってきた。
「えっ？」
私は歩きながらお母さんの方を振り向いた。
「そう言えばそうだな。今朝まではつけていたのに、いつの間にかなくなっているからな。」
お父さんも言った。
「あの…、それは…。」
確かに私もこれについてはどう答えたらいいのか考えてはいた。

しかし突然指摘されたものだから返答に困ってしまった。
「お前、今朝あの人間の男に会った時に渡したんじゃないのか？」
前方を歩いていたスピラーが振り返って言った。
「だから『お前』って何よ！それにどうして私が翔に会ったことを知っているのよ！？」
「俺、今朝見た。」
興奮する私とは対照的に、スピラーは冷静に言ってきた。
（まさか、見られていたの？）
全然予想していなかったことを言われ、私は思わず立ち止まり、動揺してしまった。
「アリエッティ。まさか、また人間の少年に会ったのか！？」
立ち止まったお父さんは厳し目の口調で問いただしてきた。
もう隠すことは出来ない。私は正直に言う覚悟を決めた。
「…はい。…今朝、翔という人間の男の子に…会いました。」
「またあの人間の少年に会ったのか！関わるなと言ったのに…！」
「あなたそれでよく無事に戻って来られたわね！！」
お父さんは怒りたいのを我慢しながら、お母さんは腰を抜かすように驚きながら言った。
スピラーは無言のまま「ほら見ろ。」とでも言いたげに私を見つめていた。
「翔は怖い人なんかじゃないわ。彼がいたおかげで私はお母さんを助けることが出来たの。」
「それはどういうことだ！？」
事情を知らないお父さんが私に問いかけてきた。
私は一体この後どうなるのかしらという不安を抱えながらも、正直に話すことにした。
引越しの前日にお母さんが行方不明になり、翔に助けを求めに行ったこと。
泣き出してしまった私に「一緒に探そう。」と言って、優しく手を差し伸べてくれたこと。

翔が苦しそうな表情の中で必死に走り、救出に向かっていったこと。
お母さんが閉じ込められている場所を指差して教えてくれたこと。
私がついにお母さんに会えた時、「よかったね。」と言っているかのように、優しく私を見つめてくれたこと。
そして今朝、私に角砂糖を手渡してくれたこと。
そのお礼に、翔に髪飾りを手渡したことを話した。
「そういうわけなの。その角砂糖は私のかばんの中に入っているわ。」
私は最後まで言い終わるとかばんの口を開け、それを見せた。
お父さんとスピラーは何か言いたげな表情をしたが、結局黙っていた。
「それはワナよ！また私達をおびき出そうとしているんだわ！」
「翔はそんな目的で渡したんじゃないわ！きっと私達の幸せを願ってくれたからよ。少なくとも私はそう信じているわ。」
私はお母さんを必死に説得するように言った。
「…まあ、確かにその人間にもそういう気持ちもあったかも知れん。それは理解しよう。だからと言って人間を信用したり、安易に近づいたりしてはいかんぞ！」
「はい。分かっています。私だって翔が優しい人間だということは分かったけれど、人間そのものを信用したわけではないから。」
「信用なんて絶対にしてはだめよ！私のようにさらわれるのがオチだから！」
「はい。」
「それにしても、小人と人間が会話をし、協力までするなんて！一度その人間の顔を見てみたいわね！」
お母さんはそう言いながらふてくされていた。
「あら、お母さんはすでに翔に一度会っているわよ。」
「えっ？いつ？」
「私がビンに閉じ込められたお母さんを救出して抱き合って喜んで

いた時よ。その時お母さんは振り返って一瞬だけ翔の顔を見ているわ。お母さんはすごく驚いてパニックになっていたけれど。」
「あ、あの時…！？」
お母さんは顔を真っ赤にして恥ずかしがった。その姿はいかにもオッチョコチョイのお母さんらしかった。
「アリエッティ。色々あったようだが、勇気を出して正直に話してくれてありがとう。人間と関わったのはもう済んだことにして、今からはまた小人としての掟を守りながら過ごしていくことにしよう。」
お父さんは私に優しく言ってくれた。さっきまで厳しい表情はもうそこにはなかった。
「はいっ！」
「では、また歩き出すとしよう。」
お父さんは私達に号令をかけると、今度は先頭に立って歩き出した。

しかし重い荷物を背負っている私達にとって、新しい家までの道のりは長く感じられた。
もう景色やセミの声、辺りにいる昆虫などを気にしている余裕はなかった。
私の額からは次第に汗があふれてきた。
無理もない。まだ午前中とはいえ、すでに太陽は高く昇りつつあった。
それに今日は人間世界で言うなら間違いなく真夏日になる日だった。
「ハア…。ハア…。新しい家はどれくらい歩けばいいの…？」
お母さんが弱々しい声で問いかけた。
「…あと１０分くらいだ。」
スピラーが指折り数えた後に答えた。
「少しは休めないものかしらねえ…。そろそろ暑くなってきたし…。

」
お母さんの足はどこかふらついていて、下手すれば倒れてしまうかもしれない状態だった。
本音を言えば私も休みたかった。
でも早く家にたどり着きたかったため、我慢しながら黙って歩き続けた。
するとその時、お父さんが突然「静かに！」と言ってきた。
私達は驚いて立ち止まった。
「何？お父さん。」
「しっ！声が大きい！」
お父さんはそう言って私を黙らせると、スピラーの顔をじっと見た。
スピラーはこっくりとうなずくと、持っている荷物をそっと降ろし始めた。
「何？何かいるの？」
私は小声でお父さんに話しかけた。
「ああ。これは面倒なことになりそうだ。」
私よりも小さな声で話すお父さんの表情は険しかった。
（一体何が起こったの？まさか人間？）
私を含めた一行に緊張が走った。
すると草むらからガサガサと音がし、やがて緑色の物体が姿を現した。
「イヤーー！カマキリ！！」
お母さんが腰を抜かしながら叫んだ。
「バカ！！大声を出すな！！」
驚いたお父さんは思わずお母さんに向かって叫んでしまった。
それが相手の気持ちを高ぶらせることになったのだろうか、カマキリは明らかに敵意を見せながら私達をじっとにらみつけていた。
恐らく大人のカマキリなのだろう。私達の身長よりも大きくて、鋭いトゲのついた両前足で私達を威嚇していた。

あんな前足でまともに攻撃を受けたらただでは済まないだろう。
「よりによって面倒な敵に出くわしたな…。」
お父さんは持っていた荷物をそっと降ろしながらつぶやいた。
お母さんはしりもちをつき、腰を抜かしたまま、顔も手も足もガタガタと震えていた。
もしカマキリに襲われたら、お母さんはなす術もなく餌食になってしまいそうだった。
一方の私はお父さんの影に隠れたくなった。
しかしその時、私のせいで引っ越すことになった罪悪感がこみ上げてきた。
（そうだ。お父さんに頼ってばかりではいけない。私に出来ることがあるのなら自分でやらなければ…。）
そう思うと、私はしまっておいたまち針を取り出した。
私が戦って勝てるかどうかは分からない。でも勝たなければ未来はない…。
私はこれまで経験したことのない緊張感の中で戦闘態勢に入ろうとした。
その時、突然「ここは俺がやる。」という声がした。スピラーだった。
彼は私に「下がってろ。」と言わんばかりに手を伸ばして私を制止してきた。
「スピラー。大丈夫なの？」
「大丈夫。俺一人でやる。」
スピラーはそう言うと持っていた弓と矢を手に、一人でカマキリに立ち向かっていった。

スピラーはうまく間合いを取りながら弓矢で攻撃を仕掛けた。
彼はカマキリに隙が出来るとそれを見計らって、今度はナイフに持ち替え、一気に勝負をつけにいった。
（※あまり描写をしたくない光景だったので、私にはこれだけしか

書けません。ご了承ください。）

スピラーがカマキリを倒してくれた後、私達は再び歩き始めた。
彼は自身の大活躍でとても誇らしげな表情をしていた。
一方、お母さんはただでさえ足がふらついている上に、青ざめた表情で「私ちょっと気分が悪いんだけど…。」と言っていた。
さっきのカマキリとの戦闘シーンが脳裏に焼きついてしまったせいかもしれない。
（確かにその気持ちは理解出来るけれど、とにかく助かっただけでも感謝しなければ…。）
私は直接スピラーに感謝の言葉を言う気にはなれなかったけれど、それでも心の中で彼に感謝していた。
それから間もなく、前方に一軒の家が見えてきた。
「お父さん、あの家？」
「ああ。正確に言えば倉庫だが、あそこが新しい家だ。」
お父さんは指差しながら教えてくれた。
倉庫の左側には斜面に木々がたくさん生えていて、そこから先は雑木林となっていた。
一方、右側には稲がたくさん生えている田んぼがいくつもあり、一角だけ色々な作物が植えられている畑があった。
「お父さん、あの建物には人間が住んでいるの？」
「スピラーらの話では普段は無人だそうだ。田植えや稲刈り、さらには畑の作物を一度に収穫する時に、昼間の時間だけ来るそうだ。」
「それじゃ、早朝や夜の時間なら安心して『借り』に行けるわね。」
「そうだな。だがこれからはわらについている稲穂や、畑で間引きの対象となる若い芽などが主な食糧になる。パンやビスケット、角砂糖などは入手しにくくなるが、それは覚悟してくれ。」
「近くに民家はないの？」
「少し離れた所まで行けばあるが、途中で人間やカマキリ、タヌキなどに出くわすと面倒なことになる。出来れば下手に行かない方が

いいだろうな。」
「そうなの…。」
お父さんは他にも、建物に電気自体は通じているが、自分達が住む場所に電気を引くためには配線を加工しなければならないことや、ガスボンベがないため、ガスが使えないことも教えてくれた。
確かに食事や快適性などでいくつか不便なことはありそうだったが、私はそれらをしっかりと受け止める覚悟を決めた。
やがて倉庫が目の前まで迫ってきた。
建物の右横の部分には雨よけのひさしがあって、その下には一台の一輪車が置かれていた。
私達は入り口として使えそうな隙間から中に入った。
内部では見慣れない機械類（後で知ったことですが、田植え機やコンバイン、草刈り機と言うそうです。）やカマ、のこぎり、軍手といった道具があった。
少し奥にいくと去年の秋に刈ったと思われるわらが山積みになっていて、その上には布きれがかぶせられていた。
よく見るとわらには確かに米粒が残っていた
「引っ越し前に砕いたビスケットなどを食糧として持ってきてはいたけれど、これだけ米粒があればしばらくの間食べるものについて心配する必要はなさそうね。」
「そうだな。あとは水と火を確保出来ればな。」
「でもあなた、ここにガスはないと言っていたじゃない？」
「わらを燃料として使えば何とかなるだろう。」
「じゃあ水はどうするの？」
「それが問題だな。水の出る蛇口があそこにあるが、支柱を登っていかなければならないし、小人の力で蛇口をひねって水を出せるかどうかが分からないからな。」
「それじゃ水汲みに行かなければならないの？」
「最初はそうなるかもしれん。だがこれから工夫して何とかするから心配するな。」

「はい。」
お父さんとお母さんは中の様子を見てこれからの過ごし方について話し始めた。
「あの、お父さん。私達が住む場所はどこ？私、早くこの荷物を降ろしたいの。」
私は話に割り込んで質問をした。
「おお、そうだな。あの奥にござやマットなどが並んでいる所があるだろう。」
「はい。」
「あの裏の部分だ。そこから床板を外して下に降りられるから、先に行きなさい。」
「分かりました。」
私はお父さんからの指示を受けて、指差された場所に向かって歩き始めた。
「俺も一緒に行く。」
スピラーはそう言って私と一緒に歩き始めた。

私とスピラーは言われたとおりに下に降りていった。
そこにはちょっと薄暗いけれど、広々とした空間が広がっていた。
以前住んでいた所ほど充実はしていなかったが、とりあえず住むことに支障はなさそうだった。
私はやっとのことで荷物を降ろすことが出来た。
「はあ…。やっとゆっくり出来るわ…。」
ずっと続いていた緊張感から開放された私はその場にへたり込むように座った。
そしてハンカチを取り出し、顔中にあふれ出てきた汗を拭いた。
「何だ。お前そんな程度でへたばってんのか！俺はまだ余裕だぞ！」
スピラーはまるで自分の体力を自慢しているかのように言ってきた。
「だってしょうがないじゃない！私は女の子だし、あなたとは育ち

も違うんだから！」
「ふうん。まあ、いいや。俺はこれから残りの荷物を運んでくる。そしてあのカマキリの所に行って、食べられる部分を手に入れる。」
スピラーの口調はやっぱり自慢話のように聞こえた。
しかし疲れきっている私は「そう…。」としか言う気になれなかった。
「あ、それからさ。」
「何よ。」
「お前…、いや、アリエッティ。ずっと疑問に思っていたんだけど、一体どうやったら人間とあんなふうに仲良く話せるようになるんだ？教えてくれよ！」
「えっ？」
突然意外なことを言われ、私は返答に困ってしまった。
「そうねえ…。」
「なあ。どうやったらいいんだ？」
「…。」
私は無言のまましばらくじっと考えた。
しかしいくら考えてもいい答は浮かんでこなかった。
「…まあいいや。それじゃ俺、行ってくる。」
スピラーはあっさりと引き下がると、上に昇っていった。
（それなら興味深そうに聞かないでよ！）
疲れていたストレスもあったのだろう。口には出さなかったが、私はイライラした口調で返した。
スピラーはその後、お父さんとお母さんの持っていた荷物を持ってまた降りてきた。
そして全部運び終わるとカマキリの所に一目散に向かっていった。
ようやく一人になる時間が出来た私は、壁にもたれて一休みすることにした。
すると上の階からお父さんとお母さんが何やら話をしているのが聞こえてきた。

（何かしら？）
私は耳をすまして聞いてみた。
「アリエッティが人間からもらったという角砂糖はどうする？」
「どうしようかしら。使っていいものかしらねえ。」
角砂糖自体は私の持っているかばんに入っていた。
しかしその会話を聞いて（まさか捨てられてしまうのかしら？）と不安になってきた。
私は説得をしに行きたくなった。しかし疲れのほうが先行してしまったため、壁にもたれたまま会話を聞き続けた。
「そんな角砂糖でシソジュースを作っておいしいのかしらねえ。」
「アリエッティならおいしいと言うだろう。まあ今回ばかりは人間の善意を受け止めることにしてもいいじゃないか。これからの生活の中で貴重な調味料になることは間違いないだろう。」
「でもねえ…。」
「ホミリーだってその人間のおかげで助かったそうじゃないか。」
「まあ…、そうだけれど…。」
「とにかくありがたく使わせてもらおう。その方がアリエッティも喜ぶぞ。」
「…まあ、あなたがそう言うのなら…。」
どうやらお父さんが説得してくれたおかげで、角砂糖は捨てられることなく、無事に使ってもらえそうな状況になった。
「よかった…。」
私はそうつぶやくと緊張の糸が切れたのか、まだ午前中なのにもかかわらず壁にもたれて眠り込んでしまった。
後にお父さんが教えてくれたことだけれど、この後お母さんが来て、私の隣で一緒にぐっすりと寝ていたということだった。

それから2日後。この日はお昼頃に短い時間だけ雨が降った。
その頃、私はお父さん、お母さんと3人で昼ご飯を食べていた。

食後にはお母さんが作ってくれたシソジュースをみんなで飲んだ。シソの味と砂糖の甘みがうまくミックスされていて、とてもおいしかった。
私は飲みながら翔の顔を思い浮かべた。そして心の中で（翔、ありがとう。）と言い続けた。
私達が昼ごはんを食べ終わった後、お父さんは外の天気を気にして家の外に出ていった。
数分後、お父さんは出かけた時よりも明るい表情で戻ってきた。
「あなた、外はどうなっていますか？」
「もう晴れている。そして葉に雨粒がついている。」
「それじゃ、今なら飲み水や家事用に使うための水を確保出来そうですね。」
「うむ。」
うれしそうな表情のお母さんとは対照的に、お父さんは表情一つ変えずに答えた。
「それじゃ、私が集めてくる！」
私はやる気満々に名乗り出た。
「アリエッティ。その気持ちはうれしいけれど、慣れない土地では下手に外に出たら危ないですよ。」
「平気よ。私だって家族の役に立ちたいんだもん！」
「でも…。」
お母さんは相変わらず私のことを心配していたけれど、私はあきらめずに返した。
「あなた、どうしましょう…？」
「行ってこい。」
お父さんはきりっとした表情で即答した。
「ありがとう、お父さん！」
私は初めて「借り」に行くことを許してもらえた時のように喜んだ。
「…じゃあ、お願いするわね。」

お母さんは相変わらず心配をしながらも、折れたようにして答えた。

私は自分の部屋に行くと、早速普段着から赤いワンピースに着替えた。

そして部屋の片隅に置いてあったまち針を腰に差した。

服装はちょうど古い屋敷で「借り」に出かけた時と同じだった。

唯一違う点は髪飾りがあるかないかだった。

部屋の外ではお父さんが自分で加工したバケツを二つ手に持って立っていた。傍らにはお母さんもいた。

「それじゃ、頼んだぞ。」

お父さんはそう言うと、そのバケツを私に差し出してきた。

私は張り切りながらそのバケツを受け取った。

「ありがとう。私、がんばってきます！」

「アリエッティ。それじゃお願いしますね。水が手に入る時にたくさん確保しておきたいから何回も水汲みに行くことになるけれど、任せましたよ。」

いつもは心配性なお母さんにしては珍しく積極的なことを言ってきた。

「はいっ！それじゃ行ってきます！」

私はさっきよりも張り切って返した。そして倉庫の隙間から外に出ていった。

私は早速近くに生えている草の葉についた水滴をバケツに入れた。

大体2～4滴を入れたところで一つのバケツはいっぱいになった。

私は両方のバケツがいっぱいになるとすぐに家に戻った。

家ではお父さんとお母さんが水をためておく入れ物をいくつも用意して待っていてくれた。

「お帰り、アリエッティ！」

お母さんは私が無事に戻ってきたことを心から喜んでいるようだ

った。
私にとっては大げさに見えたが、それは割り切って考えることにした。
「まずはうまく出来たな。」
お父さんはバケツから入れ物に水を移しながらそう言ってくれた。
私はその後も作業を続けた。
まだ新しい土地ということで、何が待っているか私達には予測がつかず、またカマキリなどの外敵が出てきたらどうしようかという思いもあった。
しかし、幸いそれらに出くわすことはなく、せいぜい敵意のない蟻やダンゴムシ、てんとう虫などの小さな生き物を見かけた程度だった。
水汲み自体は順調に進んだ。
しかしだんだん家から離れた場所まで歩いていかなければならなくなった。
さらにはだんだん風が出てきたため、葉についていた水滴が落ちてしまうようになってきた。
最初は張り切っていた私も水が手に入りにくくなり、さらには歩く距離が長くなるにつれてだんだんきつくなってきた。
顔や腕からはだんだん汗があふれ出すようになった。
両手の握力も少しずつ落ちてきたような気がした。
また遠出するほど外敵に出くわしてしまう確率も高くなるため、不安な気持ちもこみ上げてきた。
それでも、お父さんとお母さんに今までかけてきた迷惑を少しでも取り返したいという思いが私を奮い立たせていた。
水汲みはやがて最後の一回を残すのみとなった。
お気に入りのワンピースはすでに汗でかなり濡れていた。
すでに体は疲れ、両腕は筋肉痛になりそうな状況だった。

もしスピラーが一緒だったら「何だ。お前そんな程度でへたばってんのか！」とからかってきただろう。
今まで水が簡単に手に入る生活をしていたのが一変してしまったせいで、私は突きつけられた現実に圧倒されそうになった。
今までの生活がいかに幸せだったのか。いかに恵まれていたのか。
そう考えると私のせいで引っ越すことになってしまったことがなおさら悔しくなった。
でも、何があっても生き延びていかなければ…。
私は疲れた体にむちを打ち、流れる汗をぬぐいながらきれいな水が手に入りそうな場所を探した。
途中、何かねずみみたいな動物が近くを通りかかるのを見つけた。
私はそっとバケツを置くとまち針に手をやり、戦闘体制に入ろうとした。
しかしその生き物は私に気付いていないのか、やがてそのまま通り過ぎていった。
その動く生き物が一体何だったのか、結局はっきりと確認することは出来なかった。
しかし今さら確認する気にもなれなかった。
スピラーなら仕留めて食糧にするために表に出ていき、戦いを挑んだかもしれない。しかし私にとっては出来るだけ戦闘を回避し、何ごともなく済ませることが最善の選択だった。
私はほっと一息つくとバケツを持ち、なるべく足音を立てないように歩き出した。

水汲みを始めた頃は草の葉に結構水滴がついていたが、その後水が乾いたのか、葉から落ちたのか、この時間になると水汲みに適した水はなかなか見つからなかった。
私の心には少しずつ焦りが出てきた。
もしかしたら、最後は空のまま家に戻るのかもしれないという気持ちにさえなった。

それでも草の葉に水滴がまだ残っているのを見つけ、それをバケツの中に入れた。
その作業を何回か繰り返し、どうにか二つのバケツを水でいっぱいにすることが出来た。
（よし。これであとは家に戻ればこの仕事は完了だわ。）
私はそう思うとリフレッシュするために近くを流れている小川の所まで来た。
途中、石や落ち葉、小枝などのために水がせき止められ、小さな池のようになっている箇所があった。
しかもそこはちょうど日陰になっていたので、一休みするにはちょうどいい場所だった。
私はそこに行くとバケツと腰に差していたまち針を地面に置き、切り立った土手の上から池のようになっている場所を見つめた。
まわりにはそよ風が吹いていて、木の葉の揺れる音が絶えず聞こえていた。
その音を聞いているうちに暑さや疲れを忘れ、穏やかな気持ちになることが出来た。

（さあ、早く帰ってお父さんとお母さんを安心させてあげないと。）
すっかり気分転換出来た私はそう思うと立ち上がり、まち針を拾おうとした。
しかしその時、急に強い風が吹いた。
「きゃあっ！」
私は驚き、思わず大きな声をあげた。
その時、置いてあった針が風にあおられ、回転しながらまっさかさまに川に吸い込まれていくのが目に入った。
「あっ！まち針がっ！！」
私は思わず叫んだ。しかしその時にはもう手遅れだった。
「どうしよう…。私が初めての『借り』で手に入れた、大切なものなのに…。」

もちろん取りに行きたくはなった。
しかし私の身長よりも深い場所に飛び込んでいって、果たして助かるのだろうか。
もしかしたらおぼれてしまうかもしれない。
そんなことになってしまったら…。
もはや打つ手はなかった。
……。
私は起きた現実が受け入れられず、気がついたらがっくりとうなだれていた。
それは初めて「借り」に出かけた時に、翔に私の姿を見られ、さらには角砂糖を床に落としてしまった時のショックに似ていた。

やがて私は重い気持ちを抱えたまま家に戻ろうと決心した。
悔しい気持ちはなくなっていなかったが、起きたことをいくら悔やんでも仕方がなかった。
恐らくこんな時、お父さんなら「済んだことだ。」ときっと言うだろう。
私はそれを思い出し、自分に「これはもう済んだことよ。」と必死に言い聞かせた。
そして水が入ったバケツを両手に持って振り返り、重い足取りで家に向かって歩き始めた。
その時、後ろから何か声が聞こえたような気がした。
私は一瞬獣か人間が現れたのかと思い、はっとして振り返った。
しかし誰もいない。
「…誰ですか？」
私は両手に持っていたバケツをその場に置き、近くの草むらに身を隠した。
バケツに入っていた水は勢いのあまり、少しバケツからこぼれてしまった。
私はもしもの時に備えて、近くに砂利か何か、とにかく武器にな

りそうなものを探した。
その時今度ははっきりと『お嬢さん。』という声が聞こえた。
何？もしかして姿を見られたの！？
私は金縛りにあったように草むらの中でじっとうずくまった。
『お嬢さん。怖がらなくてもいいですよ。私は人間ではありません。川の神「ヘルメス」と申します。あなたがさっき川に落とした物は、金のまち針ですか？それとも普通のまち針ですか？』
（えっ？まさか拾ってくれたの？）
私は一瞬うれしくなった。しかしここで出ていくわけにはいかない。
どうしよう…。私の心は揺れ動いた。
『もう一度聞きます。落とした物は、金のまち針ですか？それとも普通のまち針ですか？』
声の主はまた質問をしてきた。
（こういう時、私はどうすればいいんだろう？お父さんがここにいたら何て答えるんだろう？でも今はお父さんもお母さんもいない。私が自分で解決しなければ。）
『私はあなたに危害を加えようとしているのではありません。落し物を届けようとしているだけなのです。姿は見せなくてもいいですからどうか答えてください。』
（どうしよう…。でもこのまま黙っているわけにもいかない。何とかして早くこの状況を打開しなければ。とにかく何か言おう。）
私は大きな深呼吸を一つすると、質問に答える覚悟を決めた。
「あの…、まち針…ですよね？」
『はい、そうです。少し時間を要してしまいましたが、もう一度お聞きします。あなたがさっき川に落としたものは、金のまち針ですか？それとも普通のまち針ですか？』
当然私が落としたものは普通のまち針だ。でも何故こんな質問をしてくるのだろう？
そもそも私は「金」というものが何なのかをよく知らない。

もしその価値を知っていたら考え方も変わっていたかもしれないけれど…。
「あの…、普通のまち針です。」
私は余計なことを考えず、普通に答えた。
『あなたは正直者ですね。よろしい。ではごほうびとしてあなたのまち針に私の力を宿しておきます。もし困ったことがあったらそのまち針に話しかけてください。私が一度だけあなたの相談に乗ります。』
「えっ？相談…ですか？」
『はい。困った時に頼りになると思います。それでは私はこれで失礼します。あなたに幸あらんことをお祈りしています。では。』
ヘルメスと名乗った川の神様（結局最後まで姿は見ていないけれど…。）はそう言い残していった。
それ以降はもう声が聞こえてこなかった。
（もう、出ていってもいいかしら？私の姿を見られずに済むかしら？）
私はそう考えると草むらからそっと顔を出した。
視線の先には確かに私が落としたまち針が落ちていた。外見は何ら変わっていなかった。
私はその針を腰に差すと、しばらく放ったままになっていたバケツを両手に持ち、家に向かって歩き始めた。

家では私の帰りを心配していたお父さんとお母さんがドアの前で待っていた。
「お帰り！アリエッティ！」
お母さんは緊張から解放されたのか、私を見るなり駆け寄ってきた。
「ただいま、お母さん。」
私は肩で息をしながらそう言うと、バケツを地面に置いた。
「無事でよかった。」

お父さんはゆっくりと歩きながら近づいてきた。
「はい。無事に帰ってきました。」
私はお父さんの顔を見て、微笑みながらそう言った。
すでに体は疲れきっていたが、お父さん、お母さんの喜ぶ顔を見たら私もうれしくなった。
私が運んできたバケツはお父さんが持つことになり、私達は3人一緒に家の中に入っていった。

私は台所でシソジュースを一杯飲み、自分の部屋に入っていった。
そして汗を拭き、服を着替えるとまち針を大切そうに持って自分のベッドに横になった。
疲れきっていたせいで、一旦横になると起き上がる気力も失くなってしまった。
（少し昼寝でもしよう。体だけでなく、色々あったせいで心も疲れたし…。）
私はそう思いながら目を閉じた。
そしていつの間にか、深い眠りへと落ちていった。

まどろみの中で私はふと、翔との間に起こったことを思い出した。
私がローリエの葉とシソの葉を取っていた時に初めて出会った時のこと。
初めて「借り」に出かけてティッシュを手に入れようとした時に、姿を見られた時のこと。
翔が「わすれもの」という書き置きと共に角砂糖を置いていった時のこと。
お別れを言いに行った時に、「滅びゆく種族」と言われて悔しい思いをした時のこと。
お母さんが行方不明になって、一緒に助けに行った時のこと。
そして引越しの日の朝にニーヤのおかげでもう一度会えた時のこ

と。
私のおかげで生きる勇気がわいてきたと言ってくれたこと。
翔、一緒にいられたのは短い時間だったけれど、今となっては思い出深い出来事になったわよ。
そう言えば、今日が心臓の手術を受ける日なのよね。
翔、もう手術を受けているのかな？
がんばっているのかな？無事に生き延びてくれるのかな？
私のように元気な体になってくれるかな？
…でも、いくらそう思ったところで、確かめる術はなかった。
ただ祈るしかなかった。
翔…、がんばって。
あなたは私のお母さんを助けてくれた恩人なのに…。
せっかく小人と人間の間にある壁を乗り越えて分かり合うことが出来たのに…。
お願い、翔。生きて！
死んじゃ嫌よ！
死なないで！お願い…！
私は心配のあまりにいつの間にか涙が出そうな心境になった。
それはお母さんが行方不明になって、翔に助けを求めに行った時の気持ちに重なって見えた。
『…。』
その時、ふと心の中で私を呼ぶような声が聞こえた。
「誰？私に話しかけるのは。」
『小人のお嬢さん、何か困ったことがおありですか？』
その声は聞き覚えがあった。
「あなたは確か、私にまち針を返してくれた…？」
『はい。ヘルメスと申します。』
姿は見えないが、ヘルメスと名乗った声の主は私に優しく語りかけてくれた。
私は予期せぬ出来事に驚き、しばらくどう反応していいのか分か

らなくなった。
『今、あなたの心の声が、持っていたまち針を通じて私の心に届きました。何かお困りのようですが、私に話していただけますか？出来る範囲で手助けをしますよ。』
「えっ？本当にですか？」
『はい。どうか私に事情を話してくれませんか？』
「…。」
すっかり戸惑っていた私は本当に話していいのか分からなかった。
でも、ヘルメスという声の主は私にまち針を届けてくれた。だから信じていいのかも。
そう考えると話す決心がついた。
「分かりました。」
私はヘルメスに翔のことを話して聞かせた。
その神様は私が人間と親しくなってしまったことに驚いていたようだったが、それでも話を最後まで真剣に聞いてくれた。
『なるほど。では、あなたはその翔という人間の少年がどうなったのかを知りたいわけですね。』
「はい…。」
『では、私の力で5分間だけその少年と会話が出来るようにして差し上げましょう。それでよろしいですか？』
ヘルメスは優しい言い方で私に提案をしてきた。
「えっ？本当ですか？」
『はい。ただし、その少年が助かればの話ですが、よろしいですか？』
「…分かりました。」
私は一瞬ドキッとしながらも何とか返事をした。
『それから、あなたがこれから何か持ち物を落としても、私は二度とあなたの前に現れることはありません。ですから、会話が出来るチャンスはこの一度だけです。それでもよろしいですか？』
「はい。構わないです。」

私の心に揺るぎはなかった。
『分かりました。では、気持ちを集中させて、翔という少年を呼び続けなさい。その針が光り輝いている間、きっとあなたの声は届くはずです。それでは私はこれで失礼します。』
ヘルメスはそう言い残していった。
間もなく、私が手に持っているまち針はキラキラと光り始めた。
私は言われたとおりに『翔…。』と呼びかけた。
（お願い、翔。私の声が届いて！返事をして！）
私はそう祈りながら、何度も彼の名前を言い続けた。
呼び続けるうちに私の心臓は高鳴り、例えようのない不安がこみ上げてきた。
（翔…、お願い。どうか返事をして！）
眠っているはずの私の目からは思わず涙があふれそうになった。
その時、私の耳にはかすかに『誰…？誰かいるの…？』という男の子の声が聞こえたような気がした。
翔？生きているのね？
私は心を込めてもう一度「翔。」と叫んだ。
『誰？僕の心に話しかけているのは。』
今度ははっきりと翔の声が聞こえた。姿は見えないけれど、確かに翔だ。
よかった。生きていた！
私の心には安堵の気持ちが広がった。
「翔。私よ。」
『まさか、君は…？』
「そう。アリエッティよ。翔、私の声が届いたのね。よかった。」
私は涙が出そうになるほどうれしかった。
そうしていると、翔はなぜか私に謝りだした。
彼は私達のことを『滅びゆく種族』と言ったこと、自分で勝手に良かれと考えて家を置き換えてしまったこと、私達を住み慣れた家にいられなくしてしまったことをわびた。

その声は涙ぐみそうだった。
彼の意外な言葉を聞いて、私は（翔はあれからずっと申し訳なく思っていたのね。）と思った。
「謝らなくてもいいわ。私は気にしていないから。」
私は怒るわけでもなく、同情するわけでもなく、ただ自分の気持ちを素直に伝えた。
『えっ？』
「それはもう済んだことよ。私のお父さんだったらきっとそう言うと思うわ。私がお父さんに自分の勝手な行動を謝った時にもそう言っていたから。それで私は自分のやったことをもう後悔しないことにしたの。だから、翔ももう気にしないで。」
『じゃあ、僕のことを許してくれるの？』
「もちろんよ。」
私は彼を笑って許してあげた。
『ありがとう、アリエッティ…。』
翔はまた涙ぐみそうな声で言った。今度は私に許してもらえたことがとてもうれしかったんだと思う。
その後、私は彼と別れた後にあったことを話して聞かせた。
新しい家に無事にたどり着いて、すでに新しい生活をしていること。
翔が渡してくれた角砂糖でお母さんがシソジュースを作ってくれたこと。
私が人間と会って話したことや、人間が角砂糖をくれたことでお父さんとお母さんが驚いたこと。
スピラーが「一体どうやったら人間とあんなふうに仲良く話せるようになるんだ？教えてくれよ！」と私に聞いてきたことなど。
もちろん不便なことや辛いこともあったけれど、それは話さなかった。
それは翔の気持ちを一生懸命明るくさせてあげたかったからだ。
彼は命がけで病気と闘っている。不安な気持ちにだけはさせたく

ない。
だから私は今住んでいる所にはまだ電気や水道が通じていないことや雨が降った後に水汲みに行かなければならなかったことなどは隠していた。
翔との会話はその後も続いた。
彼との会話はとても楽しかった。
出来ればずっとこのまま会話をしたかった。
私がそう思っていると、突然翔は意外な質問をしてきた。
『ねえ、アリエッティ。君は今どこに住んでいるの？僕に教えてくれないか？』
私は楽しい気持ちの中でいきなりこのようなことを言われ、返答に困ってしまった。
「えっ？それは…。」
『ちょっとでいいから。せめて手がかりだけでもいいんだ。』
翔は戸惑う私に対してなおも食い下がってきた。
「…ごめんなさい。それは言えないの。翔とは色々会話出来る関係になったけれど、やっぱり私は小人なの。私には人間に見られてはいけないという掟があるし、それにお父さんとお母さんにこれ以上迷惑はかけられないし…。」
『絶対に迷惑はかけないから。約束するよ。勝手に家を置き換えたりとか、そんなひどいことはしないから。』
彼は引き下がらなかった。本気で私が住んでいる場所を知りたがっている、さらには私に会いたがっているようだった。
どうしよう…。私だって出来ることなら伝えたい。でも小人としての掟が…。
でも、ちょっとだけだったら…。
私は何を言えばいいのか整理がつかない状況の中で、ちょっとだけ言うことにした。
「…分かったわ。じゃあこれだけ言うわね。私達はあの古い屋敷の近くを流れている川を下っていったの。私は今その先に住んでいる

わ。」
『その先って、どれくらい？』
翔はちょっとでいいからと言ったのに、なおも質問をしてきた。
「……。」
私はさすがにもうこれ以上答えることが出来なかった。
もちろん心の中では伝えたい気持ちはあった。でもやっぱり言うことは出来なかった。
『あ、ごめん。また君に失礼なことをしてしまったかな？』
翔は自分の言ったことを反省したのだろう。また私に謝ってきた。
「いいの。私だって教えられないのは悔しいけれど…。でもね、私はいつか翔に会えるって信じているの。だから翔。いつかまたどこかで会いましょう。」
ようやく気持ちを整理することが出来た私は何とか彼を元気付けようと、今の自分に言える最善のことを言った。
『うん。何年たってもいいから、いつかまた会えたらいいね。』
翔は安心したように答えた。よかった、と私は思った。
しかしその喜びもつかの間だった。
なぜなら、私が持っているまち針の光り方がどんどん弱まってきたからだ。このままではあと１０秒もすればその光は消えてしまうだろう。
（えっ？もう終わりなの？もっと翔と会話したかったのに…。）
私は急にあせりと寂しさがこみ上げてきた。
「…それじゃ私、もう行かなきゃ。」
『えっ？もう行っちゃうの？待ってよ、アリエッティ。まだ君と話がしたいのに…。』
「ごめんなさい。もう時間なの。でもいつか会えるわ。あなたがあきらめなければ、きっと…。」
私がそう言ったところで、時間が来てしまった。
翔はその後も何か言いたげだったが、これ以上聞くことは出来なかった。

（…ごめんなさい、翔。私だって本当はもっと話したかった…。）
気がついたら私は会話を途中で終わらせざるを得なかった悔しさと闘っていた。

…私が目を覚ました時には、日はすでに西に傾いていた。
私は手に持っていたまち針を見ながら、翔との会話を色々と思い出した。
彼は無事でいてくれた。私のことを覚えていてくれた。私のことを想い続けていてくれた。
意外だったけれど、私に謝ってくれた。
その後は楽しそうに会話をしてくれた。
そして「いつかまた会えたらいいね。」と言ってくれた。
思えば翔の声、とても元気そうだった。
翔はきっと手術を乗り越えて、元気になってくれる。
理由はよく分からないけれど、心の中ではそんな確信があった。
これから当分の間彼の姿を見ることも、彼の声を聞くことも出来ないだろう。
もしかしたら二度と会えないかもしれない。
でも私は優しく接してくれた翔のことを決して忘れない。
「きっと元気になってね。」
私はまち針に向かって、小声でそう語りかけた。

それから数日経っても、私の心の中にはいつも翔のことが引っかかっていた。
最初はそれがうれしかった。でも時間が経つにつれて段々と悩みの種に変わってきた。
しょせん私は小人、翔は人間…。私には人間に見られてはいけないという掟がある。
だから翔とは会ってはいけない。

でも忘れることが出来ない。忘れようと思ってもやっぱり思い出してしまう。
もし忘れることが出来たとしても、私は翔に自分の居場所を少しだけ教えてしまった。
翔は元気になったら、私を探しにここまで来るのかな？それも小人の掟を知った上で。
もし探しに来てくれたらうれしいけれど、でもどうすればいいのかしら？
お父さんとお母さんは一体何て言い出すのかしら？
私自身も何を言えばいいのかしら？
……。
結局自分でいくら考えても結論は出なかった。
このことはお父さんとお母さんには口が裂けても相談出来ない。
スピラーにも相談出来ない。
自分で何とかするしかない。
でもどうしたらいいのか分からない…。
気がついたら、私は憂うつな気持ちになっていた。

翌日になっても悩みごとは私につきまとった。
そのせいで朝食を食べる時も、昼食を食べる時も食欲が出なかった。
そのせいで、お父さんとお母さんにまた心配をかけてしまった。
「まだ慣れない土地で色々大変だとは思うが、食事はきちんと食べなさい。元気になれんぞ。」
「そんなに自分で自分を責めなくてもいいわよ。そんな顔を見たら私達まで辛くなるわ。」
お父さんとお母さんはそう言いながら私を見つめていた。
（心配をかけてごめんなさい。でも私は引っ越しのことで悩んでいるんじゃないわ。別のことで悩んでいるの。）
私はその悩みごとが両親に話せないことが悔しくてたまらなかっ

た。
　それでも何とか昼食をかき込むと、私はお父さんと一緒にわらの先に残った米粒を手に入れに行った。
　お父さんは米粒がついている部分を持っていたナイフで切ると、「アリエッティ、受け取りなさい。」と言って渡してくれた。
　しかし翔のことが気になって作業に集中出来ていなかった私は、受け取る時に左手をとげに引っ掛けてしまった。
「痛っ！」
　私はとっさに右手で切った箇所を押さえた。同時に米粒を下に落としてしまった。
「大丈夫か？」
「うん。ちょっと血が出ているだけだから。」
「アリエッティ。今は「借り」の最中なんだから、それに集中しなさい。」
「はい。」
「それから引っ越しせざるを得なくなったことに関しては、もう悩まないでくれ。もう済んだことだから。」
「…はい。」
　このような感じで、私はお父さんに心配をかけながらも、どうにか無事にこの日の「借り」は終わった。

　この日はその後に仕事がなかったので、私は自由時間を自分の部屋で過ごした。
　しかし、悩みごとはまだつきまとっていた。
（このままじゃいけない。何とかして自分の気持ちを整理しなければ。）
　そんな焦りの中で、私の脳裏にはふとあるアイデアが浮かんだ。
（そうだわ。小人の掟のせいで翔のことを後ろめたく考えるくらいなら、いっそ発想の仕方を変えてみてはどうかしら？）
　私はそう思いつくと部屋を出ていき、新しい居間でこれからの生

活について話し合っているお父さんとお母さんのところに行った。
「あの、お父さん、お母さん。」
私は会話に割り込む形で話しかけた。
「何だ？何かあったのか？アリエッティ。」
「あの…お父さん。そしてお母さん、今話しかけてもよかったですか？」
「いいわよ。何か相談ごとですか？それとも『借り』の時に手を切ったことをまだ気にしているのですか？」
「いえ…、それじゃないんです…。」
私は勇気を出して思いついたアイデアを言おうとした。しかしなかなかそれを口に出すことが出来なかった。
「それじゃ何よ？」
「遠慮はするな。悩みがあるなら話してくれ。」
「…あの…。」
すでに両手は緊張のために汗をかいていて、震えていた。
（翔はいつ死ぬかも分からない恐怖と闘っていた。それと比べれば、これくらい大したことじゃないわ。さあ、言うのよ、私！）
私は必死に自分に言い聞かせ、勇気を振り絞った。
「…あの、お父さん、お母さん。今日だけは『人間に関わってはいけない。』という掟を忘れて、人間である翔という男の子のことを思い続けてもいいですか？」
私はいつの間にか目をきつく閉じ、両手を力いっぱい握りしめながらついに言い切った。
「……。」
「……。」
お父さんとお母さんはしばらく黙っていた。実際の時間はほんの数秒程度だが、私にはすごく長く感じられた。
（とうとう言ってしまった。一体どうなるのかしら…？）
私は恐怖すら感じ、思わず気が遠くなりそうになった。
「そうか…。それで悩んでいたのか…。」

私の耳にはお父さんの冷静な声が響いた。表情までは見ていないが、少なくとも怒ってはいないようだ。
私は恐る恐る目を開いた。やっぱり怒っている表情ではなかった。
「まあ、私を助けてくれた人だからねえ。」
お母さんも優しい声で言ってくれた。
「えっ…？」
「本来ならその人間のことはもう忘れろと言いたいところだが、それを言ってしまってはお前をもっと悩ませるだけになるからな。今日一日だけ許してやる。」
「私も同感です。今日だけは掟のことを忘れていいわよ。」
怒られるとばかり思っていた私にとって、お父さんとお母さんの言ったことはあまりにも意外だった。
「実はね、アリエッティが悩んでいるのはその翔という人間のことじゃないかって、うすうす分かっていたの。だから一日だけこうしてあげた方がいいんじゃないかって、事前にポッドと話していたのよ。」
「ああ。ただいつ言えばいいのかと思っているうちに、アリエッティが先に言ってしまったので、ちょっと意外だったがな。」
お父さんとお母さんはそう言いながら、事情を話してくれた。
（そうだったんだ…。悩んでいたのは私だけではなかったんだ…。）
そう思うと、私の心の中にはどんどん感謝の気持ちがこみ上げてきた。
「お父さん、お母さん、ありがとうございます！」
私は深々とおじぎをしながら、大きな声で感謝の気持ちを示した。
「これで悩みからは開放されただろう、アリエッティ。」
「はい！もうすっかりなくなりました！」
「でも、明日からはきちんと小人としての掟を守ってね。それでもいいですか？」
「はい、分かりました！それじゃ今から私、外に行って翔のことを目いっぱい考えてきます！」

「あまり遠くまで行ってはだめよ。」
「はい！」
「暗くなるまでには返ってくるんだぞ。」
「はい！」
私は元気に答えると、早速外に飛び出していった。

建物の外に置かれている一輪車の上に乗った私は、そこから引越しの時に通ってきた道を見つめていた。
そして翔がここに現れた時のことを想像してみることにした。

『アリエッティー！』
『翔！ここよ！私はここにいるわ。』
『どこ？どこにいるの？』
『一輪車の上よ。』
私がそう言うと、翔はようやく気がついた。そして私のいる所まで駆け寄ってきた。
『アリエッティ！やっと会えたね！』
『翔！私に会いにここまで来てくれたの？』
『そうだよ。君が教えてくれたわずかな手がかりをもとに、探すことにしたんだ。苦労もしたけれど、会えてうれしいよ！』
『私もうれしい！翔、あれから元気になったのね。』
『うん。君のおかげで手術が成功し、すっかり元気になったよ。』
『よかった。』
『君の髪飾りのおかげだよ。このおかげで元気になったんだ。』
翔はそう言って、ポケットからハンカチを取り出して開いた。中には私が別れの時に渡した髪飾りが入っていた。
『本当に、このおかげだよ。そしていつかアリエッティに会えたらこれを君に返したいと思っていたんだ。』
『えっ？私に？』
『うん。やっぱりこれは君のものだから。受け取ってくれるかな？』

『いいのかしら？あなたにとっても大切なものなのに。』
『これは僕に幸運をもたらしてくれた。君が持てばきっと君にも幸運がやってくるよ。だから受け取ってほしい。君が幸せになれるように。』
『分かったわ。じゃあ喜んで受け取るわね。』
私は翔の右手の中指に乗っている髪飾りを両手でしっかりと受け取った。そしてそれを自分の髪につけた。
『どう？似合うかしら？』
『うん、すごく似合っているよ。やっぱりそれは君が持っている方があっているよ。』
『そう？よかった。』
『アリエッティ、僕からもう一つお願いしてもいい？』
『何？』
『これからもここに来ていい？』
『えっ？これからも？』
『うん。今日だけじゃなくて、何度でも会いたいから。いいかな？』
『ええ、いいわよ。』
『ありがとう！その時はニーヤも連れてきていい？』
『いいわよ。ニーヤにもお世話になったから。今度は私からもお願いをしていい？』
『何？お願いって。』
『また角砂糖を持ってきてほしいの。それからあのドールハウスにあったティーポットも。いいかしら？』
『うん、いいよ。何ならドールハウスごと持ってくるよ。』
『本当に？』
『うん。ぜひ君にプレゼントしたいと思っていたから。』
『ありがとう。それからもう一つお願いをしてもいい？』
『何をお願いするの？』
『私を海に連れていってくれないかしら？』
『海に？』

『ええ。私のお母さん、海が写っている写真を見ながら「いつか本物の海を見るのが夢なのよ。」とよく言っていたの。それを聞いているうちに、私も本物の海を見たくなってきたの。だからお願いしてもいい？』
『いいよ。何なら今から行こうか。本物の海を見に。』
『えっ？今から？』
『うん。君さえよければ一緒に行こう！』
私は翔が意外なことを言ったことで驚いた。しかしすぐに決心はついた。
『いいわよ。一緒に行きましょう！』
『やった！ありがとう！』
私は喜びながらそう言うと、翔の肩に乗って一緒に海へと向かっていった。
人間のいる場所に出てくると、私は彼の胸ポケットに入り、海にたどり着くまでじっとしていた。

私はその後も翔がニーヤと一緒に会いに来てくれた時のことや、翔が私達に必要なものを色々持ってきてくれた時など、色々な場面を想像しながら過ごした。
その日の夜、寝る時間が近づいてきても、私はまだ翔のことを思い出していた。
（今はどうしているのかな？）
（もう元気になったのかな？）
（走っても大丈夫なのかな？）
（私のことを思い出してくれているのかな？）
（いつか私に会いに来てくれるかな？）
私がいくらそう思ったところで、それを確かめる術はどこにもなかった。
でも私は翔と会話をした時に少しだけだけれど居場所を教えた。
そして『いつか会えるわ。あなたがあきらめなければ、きっと…。

』と言った。
きっと翔もいつか会えると信じているよね。
そして私に会いに来てくれるよね。
私もいつか会えると信じているから…。
そして私はベッドの上に横になり、そっと目を閉じて「お休み、翔。」と言った。
（翔も「お休み、アリエッティ。」と言ってくれたかな？）
私は心の中でそう期待した。

次の日から、私は翔のことを心の片隅にそっとしまっておく決心をした。
そして、借りぐらしをしながら「人間に見られてはいけない。」という掟を守り続ける小人の少女として過ごしていた。

（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。
姉妹作品「いつか（翔Ｖｅｒｓｉｏｎ）」もぜひ読んでください。
この作品とストーリーが並行して進みながら、一部内容がリンクする箇所があります。

作中に出てきたヘルメスというキャラクターは童話「金のオノ銀のオノ」に出てくる神様の名前です。
オノを落としてしまった主人公の前に現れ、「あなたの落としたものは金のオノですか？銀のオノですか？それとも普通のオノですか？」と聞いてくるというシーンで知られています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7649n/

いつか（アリエッティVersion）

2010年10月8日13時57分発行